

荒波が打ち寄せる黒砂の浜を延々と歩くと、産卵に上陸したウミガメの足跡が月の光に浮かぶ。平成 16 年度 2 次隊員として赴任したのは、太平洋に面したサンタ・ロサ県ハワイ村。グアテマラ野生生物保護救援協会（ARCAS）の一員として 2 年間、ホームステイをして浜辺の村で暮らした。

ウミガメふ化場のスタッフとして、夜は卵を保護するための砂浜歩きが日課だった。職種は村落開発普及員で、付近の村の生活調査を行い、収入向上のための手芸品づくりや井戸整備なども行ったが、活動は手探りで、成果はと聞かれると心許ない。子どもたちの環境教育に力を入れ、一緒にごみ拾いや子ガメの放流をした日々は楽しく、充実していた。

派遣時は 32 歳で同世代の隊員と共に「おやじーず」と呼ばれ、SEDE（隊員連絡所）で仲間と過ごした時間も貴重だった。環境教育の隊員で分科会を作り、各地で視察や活動をした。他の隊員の活動を見るのは刺激的で、自分も頑張らねばと、思いも新たに任地に帰ったことを思い出す。同時期にいた仲間は帰国後も交流が続き、財産となっている。

「本職」は新聞記者で、派遣前に働いていた北海道帯広市のローカル紙・十勝毎日新聞社に帰国後に再入社し、現在は社会部長として日々ニュースを追っている。協力隊参加は「外からの視点で日本社会を見つめたい」と考えたから。留学などで都市に住むのではなく、地方で普通の住民と一緒に暮らしをしたいと協力隊を志望した。

一昨年、約 10 年ぶりに村を訪ねた。砂の悪路は舗装され、みながスマホを持っている激変ぶりに驚いたが、懐かしいママや家族、ギター先生の笑顔は変わらなかった。村を歩くと「ユーキ！」と声をかけてくれ、一緒に手芸品づくりをした女性が、今も貝のネックレスを作っていたのがとてもうれしかった。

村にたいした貢献はできなかったのは心残りだが、協力隊の 2 年間の日々は、仕事も含めて今の自分のベースになっている。今度は子どもたちを連れて村に帰りたいと考えている。

